
木枯らし紋次郎対必殺仕置人

晶輪寺零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木枯らし紋次郎対必殺仕置人

【Nコード】

N33290

【作者名】

晶輪寺零

【あらすじ】

のさばる悪を何とする、天の裁きは待つては居れぬ、この世の正義も当てにはならぬ、闇に裁いて仕置きする、南無阿弥陀仏 - 主水たち仲間と別れて江戸を後にした必殺仕置人、念仏の鉄。

ほとぼりが冷めるまで花の御江戸を離れ、箱根の湯治場で揉み療治にいそしむ鉄だったが、ここでも地元の親分による横車に苦しむ人々が居る。仕置の仕事を請けた鉄だったが、今は仲間も居ない。どうやって仕置を成し遂げようか、手を出しあぐねる鉄。そんな時、箱根にぶらりと姿を表した啞え楊枝の渡世人、上州無宿人呼んで木

枯らし紋次郎。滅法腕がたつと聞かされた鉄は、その紋次郎を使って仕置を達成しようと画策するが――この男、木枯らし紋次郎、上州新田郡三日月村の貧しい農家に生まれたと言う。十歳の時に故郷を捨て、その後、一家は離散したと伝えられる。天涯孤独の紋次郎、いつ、どのような経路で、無宿渡世の世界に入ったかは、定かでない。

必殺仕置人と木枯らし紋次郎のクロスオーバーです。

其の一

ここは相模の国。

箱根の湯治場である。

腰や膝を痛めた患者が治療のため長逗留する事が多く、それを当て込んで揉み療治なども盛んに出入りしていた。

「按摩さん、一つ頼むよ」

「へい、畏まりました」

頭を坊主に刈り込んだ、妙に垢抜けた按摩が客の求めに応じて揉み療治を始めた。

「うう、効くねえ。良い安排だ」

初老の湯治客が、顔をゆがめてつぶやいた。

「あんた、良い腕してるねえ」

「恐れ入りやす」

按摩が慣れた手付きと声調子で客に応じる。

「あたしゃ、腰の治療に毎年この宿に来てるんだが、あんた、初めて見る顔だね」

「へえ、四日ほど前工からこの宿で厄介になってやして」

「ほう、その前はどこに居なすったね？」

「江戸にね」

「江戸かい」

「一月ほど前に江戸を発ちましてね、路銀も心細くなったもんで、この腕で食い扶持を稼ごうと、箱根に寄ったんですよ」

「なんでまた、江戸から箱根くんたりまで？」

「ま、色々有りやしてね、ほとぼりを冷まそうと、しばらく江戸を離れたんですよ」

「一体、何やらかしたんかね、あんた？」

「まあ、色々有りすぎて、一言じゃねえ……」

按摩の言葉に、客は声を上げて笑った。

「ま、世の中には色々ござんすよ、按摩さん」

その間も按摩の揉み療治は続いている。湯治客はうつー、と心地好げにうなつた。

「何せ生き馬の目を抜く江戸でございますからね、浮世のしがらみって奴も並大抵じゃあございせんよ、お客さん」

「全くだ」

「お客さん、お具合は？」

「ああー……」

腰をもませていた湯治客が、起き上がって腰を逸らすように上を向いた。

「大分楽になったよ、按摩さん」

「そいつは結構な話で」

「あんたの按摩、効くねえ」

「そう言つて頂けると、張り合いもございますよ」

「わたしや、もう三日ばかりこの宿で世話になるつもりだが、その間もあんたにお願いして良いかね？」

「そいつはもう、願つても無いお話で……」

「で、按摩さん、あんたの名前はなんていうのかな？」

「名前ですか？」

坊主頭に手を置いて、按摩が答えた。

「念仏の鉄、と呼んでくださいよ、お客さん」

「念仏さんかい、道理で功德があるわけだ」

湯治客は可笑しそうに言った。

「あたしや、小田原で小物問屋をやってる平吉つてもんだ」

「平吉つつあんかい」

鉄も、既に接客用の敬語から普段の口調に戻りつつあった。

「それよりどうだい、鉄つつあん、こっちの方は？」

こっちの方、とは女遊びのことである。

「俺はよお、花の御江戸でならしたんだぜ」

「お、そいつは話が早え、どうだい、今夜辺り、湯女遊びなんてなあ」

「お、そいつあ、いいねえ。だが、先立つもんが無工」

江戸に居るときは金ができると真っ先に色町に繰り出すほど見境の着かない浪費家の鉄だったが、役人の目を気にしながらそこら中をほつつき歩いているうちに、懐が尽きたのである。江戸は日本の首都であり、当時から世界でも有数の消費地でもあったため、手にお金がなければ食いはぐれる事などなかった。宵越の金は持たない、などという肩肘張った粹な気風がまかり通ったのも、そういう風通しの良い経済構造の賜物である。

「なあに、そのくらいあたしがおごるよ」

「いいのかい、とつつあん？」

「あたしも、おおたな大店、とは言わないまでも、それなりの商人だよ。ケチな事あ言わないよ」

「そいつを聞くと元氣が出てきたぜ、とつつあんよ」

節くれだったごつい両の掌をさすりながら、鉄が舌なめずりせんばかりに嬉しそうな声音で言った。

「よし、久しぶりの豪遊としゃれ込むか。他人様の懐が宛に出来るとなりやあ、お前エ、女遊びにも一層身が入るってもんだぜ」

「おいおい――」

すっかり舞い上がり、素の口調に戻った鉄である。元来が横柄で厚かましい男だけに、一旦相手が親しみを見せると今まで抑えてきたものが一度に噴出したようである。

其の二

「ああ、極楽極楽――」

ひさご屋平吉の財布で湯女遊びに堪能した鉄は、満足そうにうめいた。もう、明け方近くである。

「あたしもたつぷり遊んだよ」

平吉も顔を紅潮させて満足げにつぶやいた。

「いやあ、効くねえ、鉄つつあんの按摩」

「そうだろう、ああははははは」

シヤレコウベに皮を一枚貼り付けたような顔をゆがめて、鉄が高笑いを放った。

「俺もよ、江戸じゃあ骨接ぎでちったあ知られた腕だからな」

「こんなに張り切ったのは何年ぶりかねえ」

「とつつあん、それが長生きの秘訣よ」

鉄は上機嫌である。

「腰を大工事にしてよ、女を抱いてだな、いつまでも達者で元気、これが男の生き方つてもんよ」

「全くだ」

二人で下品な笑い声を放った。

そんな二人の前に、一目でそっちの筋の者と分かるような厳つい壮漢が四人ほど通り過ぎた。

鉄と平吉は思わず道を明けて彼らの通り過ぎるのを待った。

「なんでえ、あいつら」

「馬貸しの東一家の身内だよ」

「馬貸しの東六？」

其の三

「馬貸しの東六ってなあ、一体工何モンなんだ、とつつあん？」

「この辺りを縄張りにしてる地回りだよ」

「しかし、馬貸したあ、ヤクザにしちゃあ妙な名乗りだな」

普通、ヤクザは在所の地名を名乗りにする。一家を構える親分などは、自分が根を下ろしている地所を名乗りにする事で、縄張りを主張するのである。下っ端などは、はったりの利きそうな稲妻とか竜巻だとか昇り竜などと言う、安っぽい名乗りをつける者も多い。

「元々は馬借の息子だったのさ、東六の奴ア」

子供の頃から手のつけられない悪だった東六は、十四の時、家を飛び出したと言う。その後、上州で盃を受け、正式に博徒になった。ヤクザとしてもかなりのやり手だったらしく、その後メキメキ頭角を現して渡世人としてもかなりの顔を利かせ、身内も増えたそうである。

「所が、東六のお袋がこの極道息子呼び返したのさ」

馬貸のかしらだった亭主が死に、東六の他に子供の居なかった母親が呼び戻したのであった。最初は当然戻る気など無いと突っぱねていた東六だったが、年老いた母に泣きつかれ、仕方無しに実家へ帰ったのである。母親も程なく他界し、店を引き継いだ東六は馬貸業などを継ぐ意思は更々無く、奉公人に暇を出し、子分たちを呼び寄せたのであった。

「それで、馬貸しか」

「そういう事よ」

「しかしよう、その東六とかいう無宿人が――」

「いいや」

鉄の言葉に、平吉はかぶりを振った。

「東六は無宿人じゃあねえ」

「無宿人じゃねえ？」

鉄は二つに割れた顎を突き出すように言った。

博徒だとか、渡世人などというのは彼らが勝手に名乗っているものであって、正式な身分ではない。しかし、無宿人というのは江戸幕府による法制用語であり、正式な呼び方なのだ。

普通、ヤクザは無宿人である場合が多い。無宿人がその世界に入る場合も有れば、博徒になつてから人別帳から名前を消される事も少なくない。と言うより、渡世人などになつたら、勘当して身内が縁を切るのである。江戸時代は現代以上に戸籍による待遇の違いが大きく、人別帳から名前を外されると無宿人となる。そうだったが最後、江戸幕府の定める行政上の公認を全て取り消され、人外の実存として、無宿人狩にでも会えば佐渡の金山に金堀り人足として送り込まれる。それも、キチンと手当てを出した上ではなく、罪人と同じ扱いである。生活苦から在所から逃げ出した農民、いわゆる逃散百章も無宿人である。何ゆえに、それほどまでの扱いを受けるというのに、息子を勘当するのであるのか？江戸時代には、連座と言う制度がある。息子が罪を犯せば場合によっては親兄弟にまで罪が及び、その監督責任を問われるのである。そうなる前に勘当して縁を切っておけば連座は免れる。そのため、息子が家を出た場合、大抵の親は勘当する。家を出る方もそれを承知で無宿渡世の世界に入るのであった。

「どういう事ったい、とつつあん」

「言つたろつ、お袋が呼び戻したって」

其の四

「親父やあ、極道息子とはとうに縁を切ってたんだが、お袋がな、亭主に死なれてから気が弱くなっちまってなあ、一人息子の東六を呼び戻して、人別長に名前を書き戻したのさ」

「はあん——」

鉄は、そのごつい手で割れ顎を撫でながら目を細めた。

「それだけじゃあねえ、東六の野郎、箱根の宿場に手工伸ばしてきやがってな、みかじめ料出せたの、随分と無理難題吹っかけてきやがってなあ」

「なるほど——」

「鉄つつあん、あんたも箱根で働くんだったら、憶えておいた方が良いぜ」

「ああ、そうするぜ、とつつあん」

鉄はその鋭角的な顔をゆがめて言った。

「どこにでも居やがるんだな、鬱陶しい野郎は」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3329o/>

木枯らし紋次郎対必殺仕置人

2011年10月5日21時08分発行